



# 仏法領

ぶつぽうりょう

第93号

発行：真宗大谷派

念信寺

〒824-0202

福岡県京都郡みやこ町犀川上高屋761

☎ 0930-42-0329

Fax 0930-42-0502

ホームページ

nenshinji.org

## 前坊守追悼号



### 「みおくる」

あなたは、いつも笑みを浮かべながら「また、お出でてください」と見送ってくださいましたね。

母と同世代で、会うたびに「お母さんは、どうしよりますか」と気にかけてくださいましたね。

子ども連れて、お寺に遊びに行くと「ちょっと、待っててね」と言いお菓子を沢山持たせてくれましたね。

私が幼い頃は、お寺は遊び場の一つだった。騒いでる私達を見て、文句一つ言わずにおやつを出してくれましたね。

いつも、優しい笑顔でお寺から、見送ってくれましたね。そんなあなたを「みおくる」のはとても、さみしく、かなしい。

あなたから、「みおくる」の色々な意味を教わった気がします。

これから、あなたのように優しく、大きなところでみおくれるように私もなりたい。

前坊守・悦美さんにささげる

(写真・文 大迫光浩)

### 後に生まれた人は

#### 前の人を訪え（たずねよ）

今回の寺報は、前坊守・悦美の追悼号としてテーマを「見送る」にしました。ただし「見送る」は葬送儀礼だけでなく、客人の見送り、一般の見送りまで視野に入れています。

昔の人は客人が見えなくなるまで、表に出てその行き先を案じて見送ったといえます。見送る側の都合、利用できるか否かで人を見るのではなく、他者の存在をもっと深いところで受け止めていたのでしょう。合掌しつつ見送る世界を頂いていたのでしょうか。

近年は相手を自分の自我感情を中心にして受け止める傾向が強くなったように思われます。それは結局、自身をも浅いところでしか受け止めることが出来ないということでしょうか。我々は仏在（あま）さぬ時代社会を生きているのだと感じます。

法然上人は『安樂集』（道・縛）を引用して、

我々は遠く久しい昔から多くの仏に出あつてきたはずである。なのにどうしてまだ生まれ変わり死に変わりして迷いの世界を出ることができないのか

と述べます。わたしが今、ここに生きているということは、それほどはるか深い迷いの生存を生きているということなのだという存在を見る視点の深さを教えられます。この迷いの生存からの離脱を懸命に求めてきたのでしよう。求道者のナマの声が聞こえる思いがします。

迷い重き私だからこそ、見捨てることなく必ず救うという、阿弥陀の誓い願いに見守られる存在としての自身を教えてきたのがお念仏の教えです。そこから自他の存在を深く見つめ、客人が見えなくなるまで見送ることが私たちの生活にまで浸透して習慣化されてきたのかも知れません。

「前を訪え」という冒頭にあげた言葉は、親鸞聖人が引用した言葉です。弔うということも先人を訪ねること、生き様に学ぶことなのだと教えられています。自己がここに在ること、存在の源を訪ねることなのでしょう。

